

室蘭工業大学-学報

NO.667



「Today at Apple」で野口聡一宇宙飛行士と室蘭工業大学公認サークル SARD が対談
(29ページに関連記事あり)

2025年 5 月号

目 次

◇ SPRING奨学生だより ◇

GlobalNet Workshop (GNW) 2025参加報告	1
トップオブアカデミー参加報告	10

◇ トピックス ◇

クモの糸の粘着力の秘密を解明 ―自然界に存在する「天然イオン液体」の発見―	19
M-COINS が香川大学 DX ラボと学生交流会を実施	22
さきがけワークショップを開催	23
公立千歳科学技術大学×室蘭工業大学コンピュータ科学センター 半導体ワーク ショップを開催	26
公益社団法人土木学会北海道支部の YouTube にむろこーほーが出演	28
室蘭工業大学公認サークルSARDが「Today at Apple」に登壇し野口聡一宇宙飛行士 と対談	29
辻 寧英教授が電子情報通信学会からフェロー称号を授与	30
パブリックリレーションズオフィスニュースレター第 3 号を発行	31
令和 6 年度学位記授与式を挙行政	32
令和 7 年度入学宣誓式を挙行政	33
PRESTO Workshop ～ Achievements and Future Prospects ～を開催	34
本学学生が日本音響学会第 153 回研究発表会において学生優秀発表賞を受賞	36
M-COINS が新入生オリエンテーションで新規メンバーを募集	37
THE 日本大学ランキング 2025 で 121～130 位にランクイン	38
特定非営利活動法人 ポロクルが「第 46 回 国際交通安全学会賞（業績部門）」を受賞	39

◇ 情報・資料 ◇

MONO づくりみらい共創機構「プレ共同研究」（1 回目）の採択	40
令和 7 年度科学研究費助成事業の交付内定	41

◇ 外部資金 ◇

奨学寄附金の受入れ	47
-----------------	----

◇ 人 事 ◇

人事異動	48
表彰	49
訃報	50

◇ 学内会議 ◇

学内各種委員会等の開催	51
-------------------	----

◇ 日 誌 ◇

学内行事・学外行事	52
-----------------	----

◇ 人物図鑑 ◇

室蘭工業大学人物図鑑 part.23～24	53
-----------------------------	----

SPRING奨学生だより

GlobalNet Workshop (GNW) 2025 (報告)

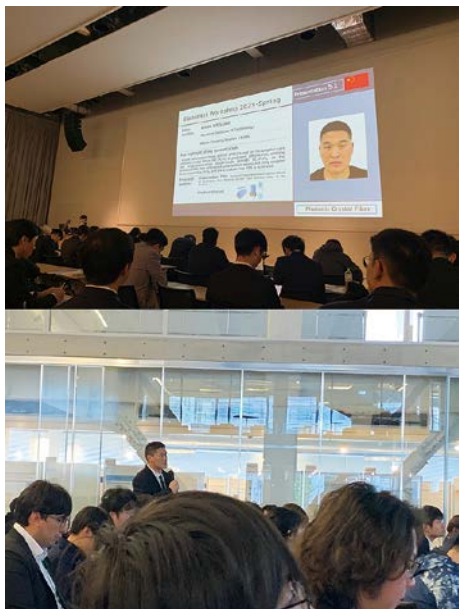
博士後期課程 2 年 王 威龍 (オウ ウェーロン)
(次世代研究者挑戦的研究プログラム生)

1. はじめに

2025年 3 月24日 (月)13:30～17:45、東京都市大学において開催された「GlobalNet Workshop (GNW) 2025」に参加しました。本イベントは、学生によるポスター発表や、初の試みとして「就職支援イベント」が開催されました。先輩留学生の実体験や企業招聘担当者の話を監聴できる貴重な機会でした。また、本研究の実践は「次世代研究者挑戦プログラム」の学習プランに適していると思われ、役立つ経験になりました。

2. 発表セッション&キャリア支援講演

初めのセッションでは、展示者による 1 分間の短いプレゼンとして、研究内容や自身の精緻について英語で発表を行いました。短い時間でも影響力のあるプレゼンが要求され、良い練習になりました。その後には、GNWスポンサーでもあるLabBase社による「Pioneering Global Career Pathways」と題した講演が行われ、日本での就職活動における実用的な情報やサポートについて知る大切な機会となりました。



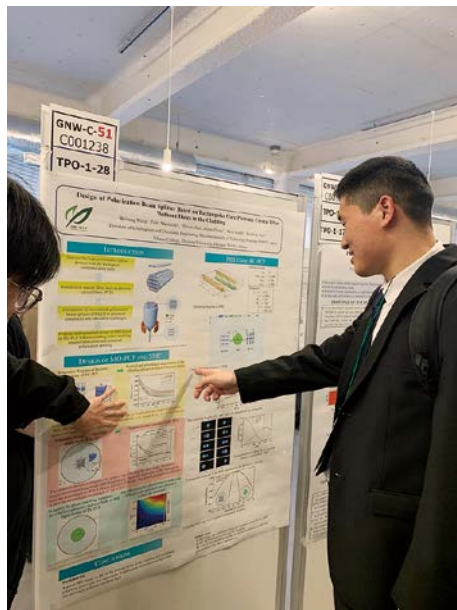
フラッシュ発表



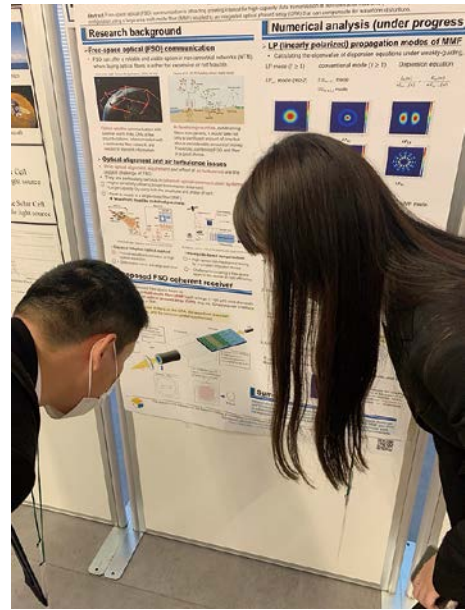
キャリア支援講演

3. ポスター発表

ポスター発表では、研究の内容だけでなく、これまでの経験や趣味など、広いテーマについて英語で発表をしました。発表後は他の参加者とのコミュニケーションや意見交換も行われ、色々な視点を取り入れるよい機会となりました。



ポスター発表の様子



他の参加者との意見交換

4. レセプションパーティー

ポスター発表終了後は、IEICEのスポンサーによる国際交流レセプションパーティーが開催され、続けて参加しました。ゆるやかな雲雨の中で研究者同士との意見交換の場となり、大変有意義な時間となりました。



レセプションの様子 1



レセプションの様子 2

5. おわりに

GNW2025への参加を通じて、国際的な環境での発表経験や、外部との意見交換など、役立つ経験を得ることができました。また、就職に関する詳細な情報や先輩の体験話を聞いたことは、自身の進路を考える上で大変有意義でした。今回は自分のポスターについて英語で説明するだけでなく、他の参加者の研究にも積極的に質問を行い、相互理解と交流を深めることができました。こうした対話を通じて、自分の研究の伝え方や視野の広げ方について多くの気づきを得られたと感じています。

本GNW2025への参加に際して次世代研究者挑戦的研究プログラムにおける「キャリア開発・育成コンテンツ」として旅費を支援していただきましたこと心より感謝申し上げます。今後もこのような機会があれば、続けて参加したいと考えています。

GlobalNet Workshop 2025

博士後期課程 1 年 WEN LIHONG
(次世代研究者挑戦的研究プログラム生)

1. はじめに

2025年 3 月24日午後、東京都市大学にて開催された「GlobalNet Workshop (GNW) 2025」に参加し、ポスター発表を行いました。本ワークショップは、次世代研究者挑戦的研究プログラムにおけるキャリア開発・育成コンテンツの一環として位置付けられており、13時30分から16時45分までの開催時間に、国内外の学生が一堂に会して交流を深めました。本イベントの目的は、国際学生と日本人学生との異文化交流を促進するとともに、留学生に対する就職支援の機会を提供することにあります。



写真1 ワークショップ開幕



写真2 山中代表の開会挨拶

2. 基調講演

ワークショップの冒頭では、電子情報通信学会 会長の山中直明氏より開会の挨拶があり、国際的な連携の重要性および研究者ネットワークの構築について強調されました。続いて、ワークショップのスポンサーであるLabBase社の代表・



写真3 1分間スピーチ 1



写真4 1分間スピーチ 2

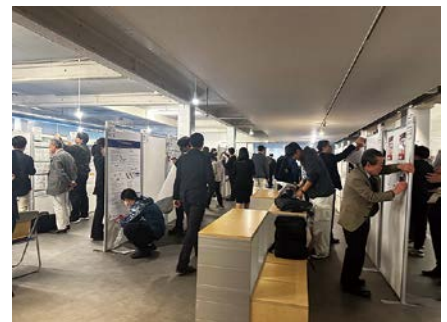


写真5 ポスター発表準備中

宮崎氏より、留学生の日本国内での就職に関する新たな視点が提示されました。宮崎氏は、多くの留学生が日本での就職活動に困難を感じている背景として、言語的な壁と日本独自の就職活動スケジュールを挙げ、それらに対する具体的な対策についても言及しました。

3. 学生によるポスター発表

本イベントの初めに、全参加者が1人1分の英語による自己紹介プレゼンテーションを行い、自身の研究分野と所属について簡潔に紹介しました。このセッションを通じて、自分の研究分野に近い参加者を迅速に見つけることができ、その後のポスターセッションでの交流を円滑に進める助けとなりました。その後、私は「Patient-Centric Digital Twin for Clinical and Synthetic Data Evaluation」というタイトルでポスター発表を行いました。本研究は多くの参加者、特に医療およびAI分野の専門家の関心を集め、活発な質疑応答と意見交換が行われました。いただいた建設的なフィードバックは、今後の研究の方向性を検討するうえで非常に有意義であり、また本発表を通じて、英語での研究発信力も大いに向上したと感じております。



写真6 教授とのポスター交流

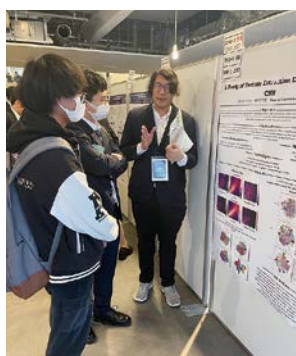


写真7 学生同士の交流

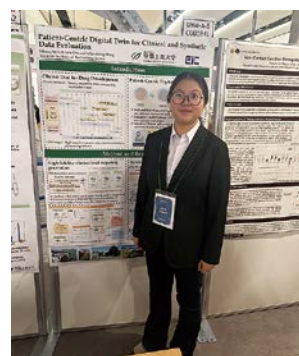


写真8 記念撮影

4. 懇親会

ワークショップ終了後には懇親会が開催され、参加者たちは和やかな雰囲気の中で食事を共にしながら、研究内容や経験、今後の展望について活発な交流を行いました。中国からの参加者として、私は多くの他国籍の研究者と交流することができました。この機会を通じて、フランス、インドネシア、日本など多国籍の研究者と新たに知り合うことができ、連絡先を交換するなど、今後に活かせるネットワークを構築する有意義な時間となりました。



写真9 提供された食事



写真10 会長の挨拶



写真11 懇親会での自由交流

5. おわりに

今回のGlobalNet Workshopへの参加を通じて、英語による発表能力の向上のみならず、国際的な視野を広げることができ、大変有意義な経験となりました。このような貴重な機会を提供してくださった次世代研究者挑戦的研究プログラムに、心より感謝申し上げます。今後も引き続き、国際的な学術交流活動に積極的に参加し、自身の研究力をさらに高めてまいりたいと考えております。

「GlobalNet Workshop (GNW) 2025」 参加報告

博士後期課程 2 年 YUAN XINGYU
(次世代研究者挑戦的研究プログラム生)

はじめに

2025年 3 月24日午後 1 時より、東京都市大学にて開催された「GlobalNet Workshop (GNW) 2025」に参加しました。今回は、講演の聴講およびポスター発表の両方に参加し、多くの刺激を受ける機会となりました。

ご講演について

13:00～13:30の間に、電子情報通信学会の会長である山中直明氏による開会挨拶が行われました。山中氏は、研究における国際的な連携の重要性や、グローバルな研究者ネットワークの構築が、今後のイノベーションを生み出す鍵であると強調していました。

続いて、15:20～15:30の間に、ワークショップのスポンサー企業であるLabBase社の代表・宮崎耕一氏による講演が行われました。宮崎氏は、多くの留学生が日本での就職活動において直面している課題として、言語の壁や日本特有の就活スケジュールを挙げ、それに対する支援の必要性を訴えていました。外国人留学生として、非常に共感できる内容が多く、特に「企業は語学力だけでなく、研究成果や論理的思考力にも注目すべき」という指摘が印象に残りました。

学生ポスター発表について

13:50～15:20の間には、全参加者による 1 人 1 分の英語プレゼンテーションで、自身の研究テーマや所属を簡潔行われました。それにより、同じ分野に関心を持つ他の参加者を見つけやすくなる工夫がなされていました。

15:35～16:45の間には、各自が自身のポスターの前に立ち、来場者の質問に答える形式でポスターセッションが行われました。私は「Building Energy Efficient Semantic Segmentation in Intelligent Edge Computing」というタイトルで発表を行いました。

この発表を通じて、様々な視点からのフィードバックをいただくことができました。たとえば、ある学生からは、「エッジ環境でのセマンティックセグメンテーションにおいて、モデルの軽量化と精度のトレードオフをどう考えているか」と質問された。これに対して、自分の研究では量子化 (quantization) と知識蒸留 (knowledge distillation) を組み合わせ



写真 1. 英語プレゼンテーション

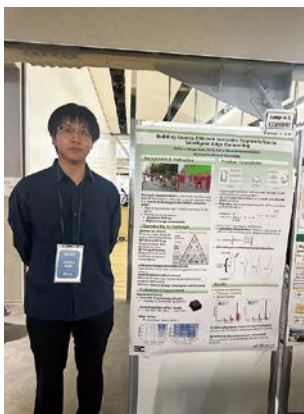


写真 2. ポスター発表

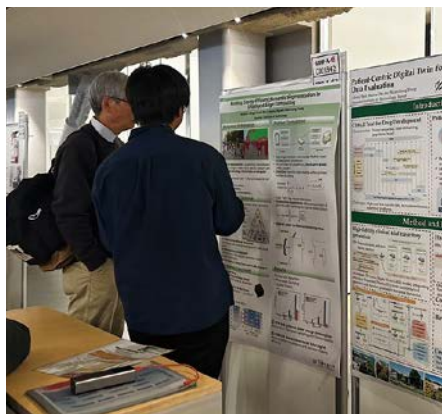


写真 3. 参加者との交流の様子

た手法を取り入れており、精度をできるだけ保ちつつも、計算コストを下げる工夫をしていることを説明しました。学生だけでなく、教員や企業関係者の方々からも貴重なご意見をいただき、多角的な議論ができたことは大きな収穫でした。

私の学び・気づき

今回の参加を通して、英語で自分の研究を説明する力が大きく向上したと実感しております。また、他大学や他分野の研究に触れることで、自分の研究の強みや課題を見直す良い機会となりました。特に、エッジコンピューティングの応用可能性について、異なる分野の方々からの視点を得られたことは、今後の研究の方向性を再検討するうえでも非常に参考になりました。

まとめ

「GlobalNet Workshop 2025」への参加は、私にとって大変貴重な経験となりました。講演では国際的な視野の広がりを感じ、ポスター発表では実践的な研究交流を通じて多くの学びを得ることができました。今後もこのような機会を積極的に活用し、研究の質を高めるとともに、国際的な場での発信力をさらに養っていきたいと考えております。

GlobalNet Workshop 2025 参加報告書

室蘭工業大学大学院 博士後期課程 工学専攻先端情報電子工学コース 3 年
波動エレクトロニクス研究室 谷口 美緒
(次世代研究者挑戦的研究プログラム生)

1. はじめに

2025年 3 月24日から28日にかけて東京都市大学世田谷キャンパスにて行われた電子情報通信学会 (IEICE) 総合大会の注目イベントの一つであるGlobalNet Workshop (GNW) 2025に、次世代研究者挑戦的研究プログラム生の一人として参加してきました。GNW2025は留学生と日本の学生・研究者との交流を促進するために、IEICE国際委員会によって企画されたもので、参加者によるポスターセッションを軸に、フラッシュプレゼンテーション、GNWスポンサー講演、Networking Receptionといった他国・他機関の参加者と国境や立場、年代を超えた参加者同士の交流を促進するイベントです。本報告書では、フラッシュプレゼンテーション及びポスターセッション、Networking Receptionについて報告致します。



写真 1 : 東京都市大学世田谷キャンパスにて



写真 2 : GNW2025 会場の様子

2. ポスターセッション及びフラッシュプレゼンテーション

IEICE会長山中先生 (慶應義塾大学 教授) の挨拶、GNWスポンサー LabBases社による講演を挟みながら、前半はフラッシュプレゼンテーション、後半は2部交代制のポスターセッションが行われました。フラッシュプレゼンテーションでは、1分間という短い時間で自己紹介や研究概要のプレゼンテーションを英語で行いました。私自身は論文に使用した真面目な写真を使用しましたが、自分の特性や個性を示すような写真を使用し、後半のポスターセッションに向けてアピールを行うべきだったと思います。国籍も大学も研究内容も様々で、飽きることなく楽しめた60分でした。

ポスターセッションは2部交代制で発表時間は45分でした。以前、本学にて実施されたASPIRE×さがけワークショップでお会いした山中先生に発表を聞いていただくことができ、「もう少し研究概要がわかるような構成や絵をもっと入れると良い。」といったアドバイスをいただくことができました。次回のポスター発表時に参考にしていきたいと思っています。

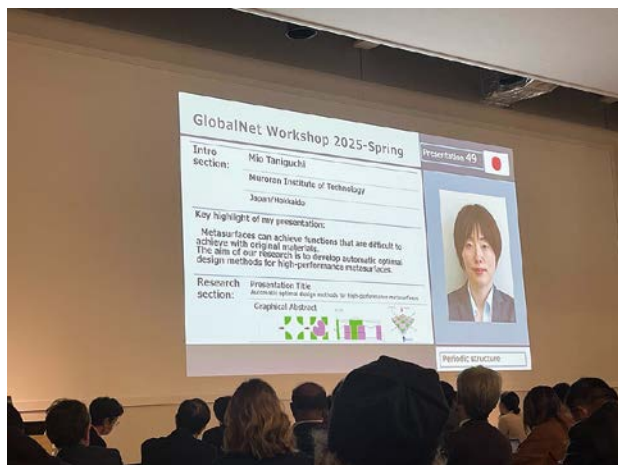


写真 3：フラッシュプレゼンテーションの様子

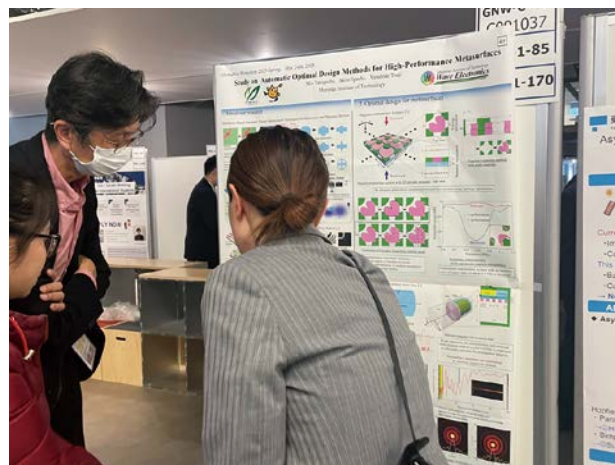


写真 4：ポスターセッションの様子

3. Networking Reception

すべてのセッションの終了後、IEICEのスポンサーによるNetworking Receptionの開催とBest Presentationsの発表が行われました。GNW2025では慣れない英語でのプレゼンテーションやポスターセッションなどが続いていたため、冷たいビールが体に染みわたるようでした。残念ながらBest Presentationsには力及ばずでしたが、発表後の食事は本当に美味しく疲れが吹き飛びました。Networking Receptionでは旧知の方、そして憧れていた先生方にお会いし、言葉を交わす機会を得ることができました。特に、光エレクトロニクス分野で著名な東京大学の中野先生には「最短経路ではない道に行くのも良い。迷ったからこそ見えるものもある。」と、これからの研究人生についてのアドバイスをいただきました。指導教員の辻先生にも同じ意味の言葉をいただいたことがあるため、昨今のコストパフォーマンスやタイムパフォーマンスに拘らず、時には回り道になったとしても、それすらも楽しんで、これからの研究人生を歩んでいけたら素敵だと思います。

最後は今日の記念に、東京大学の中野先生、本学太田先生と一緒に写真を撮っていただきました。

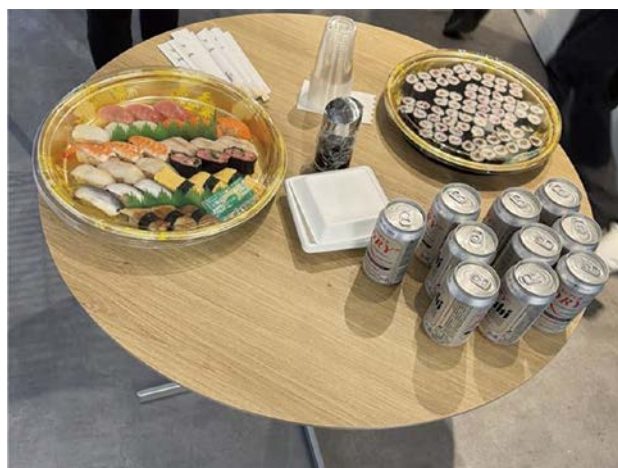


写真 5：Networking Reception の料理



写真 6：参加者の方々と

5. おわりに

GNW2025ではフラッシュプレゼンテーション及びポスターセッションにて、国内では基調な英語での研究発表の場をいただくことができました。加えて、Networking Receptionでは国内でも著名な先生方と直接お話しする機会をいただくことができました。GNW2025への参加に際して、次世代研究者挑戦的研究プログラムにおける「キャリア開発・育成コンテンツ」として旅費を支援していただいたことに心より感謝申し上げます。加えて、電子情報通信学会総合大会での一般講演の口頭発表に加えて、GNW2025への参加を快諾して下さい、ポスター作りの指導に時間を割いて下さった指導教

員の辻先生にこの場を借りてお礼申し上げます。私達の後に続く後輩たちにも、「キャリア開発・育成コンテンツ」への積極的な参加を促し、是非、自らのネットワークを広げていってほしいと思います。



写真 7：会場にて中尾先生、太田先生と記念撮影

トップオブトップアカデミー 2025

博士後期課程1年 WEN LIHONG
(次世代研究者挑戦的研究プログラム生)

1. はじめに

「次世代研究者挑戦的研究プログラム」の「キャリア開発・育成コンテンツ」の一環として、私は「トップオブトップアカデミー2025」に参加し、2025年3月10日から12日にかけて、ポーランド・ヴロツワフで開催された国際会議「Digital University Europe 2025」に出席しました。本会議はWSB Merito Universityが主催し、デジタル大学、AI教育、教育における公平性と倫理といったテーマを中心に、メインホール1室とサブホール2室に分かれて行われ、ヨーロッパ各国の研究者たちが高等教育のデジタル化について活発に議論を交わしました。



写真1 メインホール



写真2 サブホール1



写真3 サブホール2

2. 会議での学び

会期中、私は10件以上の講演を聴講し、多くの気づきと学びを得ました。特に印象に残ったのは、AIが主導する教育が将来の主流になるという見解、教育のデジタル化において公平性と倫理の問題は後回しにされるべきではないという警鐘、そして技術の「導入数」ではなく「実際の効果」に注目すべきであるという指摘です。



写真4 コーヒーブレイク



写真5 国際交流の様子



写真6 会場の様子

また、講演内容だけでなく、参加者同士の活発な交流にも大きな感銘を受けました。休憩時間には誰もが積極的に対話し、協力の可能性を探る姿が見られました。研究とは一人で完結するものではなく、社会との接点や他分野との連携を通じて価値を発揮すべきであると改めて感じました。

3. 会議イベントと都市の印象

3月10日の夜には、ヴロツワフ旧市庁舎（Wrocław Old Town Hall）で行われた開会式に出席し、美しい合唱の演奏を鑑賞しました。会期中は主催者による美味しい軽食の提供や、学生による活気あるミュージカルパフォーマンスもあり、とても充実した時間を過ごすことができました。

また、ヴロツワフ大聖堂（Wrocław Cathedral）を訪れたり、街中に点在するかわいらしい小人の像を見つけたりと、街の歴史的な魅力と遊び心あふれる雰囲気を楽しみました。



写真7 合唱パフォーマンス



写真8 街の風景



写真9 小人像

4. おわりに

今回のポーランド訪問は、国際的な視野を広げるだけでなく、異文化コミュニケーション能力や学術的な発信力を高める貴重な機会となりました。「次世代研究者挑戦的研究プログラム（JST SPRING）」の支援により、このような素晴らしい国際交流の場に立てたことを心より感謝しております。今後もこの経験を活かし、より大きな舞台で自身の研究の意義と価値を発信していきたいと思えます。また同様の機会があれば、ぜひ積極的に参加したいと考えています。最後に、董先生と太田先生には、私たちに多大なるご支援を賜りましたこと、心より感謝申し上げます。



写真9 ヨーロッパ建築



写真10 彫像



写真11 俯瞰風景

Digital Universities Europe 2025 Report

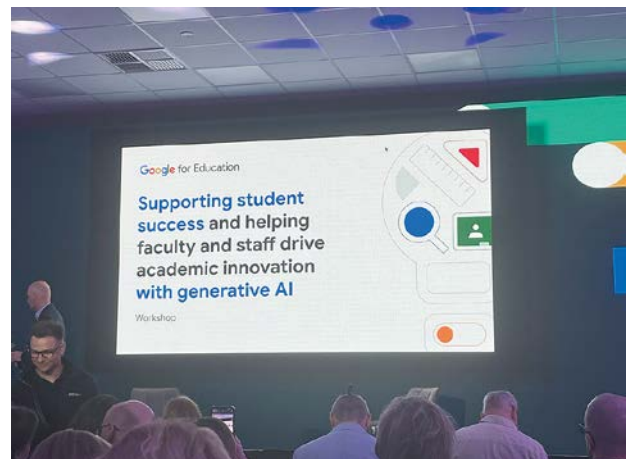
Doctoral Course Student YUAN XINGYU
(JST SPRING Scholarship Enrollee)

Conference Overview

I attended the Digital Universities Europe 2025 conference, held from March 10 to 12, 2025, at WSB Merito University in Wroclaw, Poland. The conference provided a rich and diverse program, featuring keynote speeches, panel discussions, interactive workshops, and networking opportunities. Each day began with plenary sessions delivered by prominent figures in academia and industry, followed by multiple breakout sessions that covered a wide range of topics such as artificial intelligence in education, digital assessment practices, student engagement through technology, and the strategic use of data in university decision-making.



Opening session of Digital Universities Europe 2025



Workshop by Google for Education

Sessions Attended and Focus on Generative AI

As my current research is closely related to generative AI, especially large language models (LLMs), I intentionally selected sessions at the conference that centered on the integration and implications of this technology in higher education. Among the many offerings, three sessions stood out as particularly relevant and insightful.

The first session I attended was titled "Supporting Student Success and Helping Faculty and Staff Drive Academic Innovation with Generative AI." This workshop, delivered by Google, focused on how generative AI can be harnessed to enhance both teaching and learning in higher education. It aimed to break down concerns around AI and instead highlight its potential to support creativity, streamline workloads, and foster innovation in academic environments. Together, they discussed how generative AI can make learning more interactive and engaging, how it can be embedded into curricula across disciplines, and how it contributes to upskilling both students and faculty. They also explored the role of AI in addressing global and societal challenges, and how data-driven insights generated by AI can inform institutional decision-making. What stood out to me was their emphasis on AI literacy—not just using AI tools,

but understanding how they work, what their limitations are, and how to use them ethically and effectively. The session provided me with concrete ideas on how generative AI can be introduced in a balanced and thoughtful way to improve the academic experience for both learners and educators.

The second session I attended was titled “Comparative Project on How Universities Approach Generative AI.” This session aimed to go beyond the common narratives of AI as simply a teaching tool or a cheating threat, and instead focused on how universities are integrating generative AI (GenAI) as a transformative element across all levels of academic practice. The session featured three distinguished speakers. Together, they discussed how different universities around the world are approaching the integration of generative AI—not only in teaching and assessment, but also in administration, research, and student support services. The session presented early findings from a comparative study, including case studies from diverse institutional contexts, and highlighted both challenges and innovative practices. What I found particularly insightful was the emphasis on viewing GenAI as a personal tool for all actors in the university ecosystem—students, faculty, and administrators alike. The speakers encouraged participants to think about institutional responsibility, ethical frameworks, and long-term cultural shifts when adopting AI technologies. This broadened my understanding of the role of GenAI in education and reminded me that responsible AI integration requires a collaborative and values- driven approach, not just technical capability.

Networking, Campus Visit, and Cultural Experience

In addition to the academic sessions, the Digital Universities Europe 2025 conference offered a series of well-organized social and cultural activities that greatly enriched my experience. One of the highlights was the official reception dinner, which provided a relaxed and enjoyable setting for networking with fellow participants. Over the course of the evening, I had meaningful conversations with researchers, university staff, and industry professionals from various countries, many of whom shared an interest in the applications of AI in higher education. Beyond the academic setting, the organizers thoughtfully arranged a unique cultural experience in collaboration with the DSW University of Lower Silesia. We were invited to attend a theatre performance titled “On the Road…” at the university’s AULA theatre. This rich combination of intellectual engagement and cultural immersion added a special dimension to the conference, allowing me not only to learn and exchange ideas, but also to experience the spirit and heritage of the host city in a meaningful way.



Reception dinner group photo



"On the Road..." theatre performance



Group photo at the conference venue

Conclusion

Attending Digital Universities Europe 2025 was a highly rewarding experience, both academically and personally. The sessions deepened my understanding of how generative AI is reshaping higher education, while the networking and cultural events provided valuable opportunities for connection and reflection. I returned from the conference with new insights, practical ideas, and a broader perspective that will directly inform my ongoing research and academic work.

Digital Universities Europe 2025 への参加

博士後期課程1年 幾島 晴輝
(次世代研究者挑戦的研究プログラム生)

1. はじめに

2025年3月10日～12日の3日間にわたり、ポーランドのWSBメリト大学（ヴロツワフ）で開催された「Digital Universities Europe 2025」にて次世代研究者挑戦的研究プログラムにおける「キャリア開発・育成コンテンツ」の一環として参加しました。本イベントでは、デジタル技術によって明らかになる新たな可能性を活かし、教育、学習、評価、運営、学生体験の変革を加速させることを目的として、基調講演、インタラクティブなパネルディスカッション、実践的なワークショップ、ネットワーキングなどが行われました。

2. Opening night reception

1日目の夜に行われたOpening night receptionでは、聖歌隊による歌唱が披露され、本イベントが開会しました。大学教員や企業の方々が一堂に会し、それぞれのデジタル技術の活用方法や課題意識などを共有しました。私は、Lightcast社の戦略的パートナーシップディレクターの方と交流させていただきました。同社は、労働市場を分析し、その結果を提供することが主な事業であり、データ処理、スキル識別、トレンド分析、専門的な分析セクターの作成などにAIを活用しているそうです。



写真1. Wroclaw Old Town Hall
(Opening night reception の会場)



写真2. 他の参加者との交流の様子

3. 大学や研究におけるAIの活用

2日目と3日目には、最新のデジタル技術を教育に活用した事例や今後どのように活用するのか、どんな理想像が考えられるかについて多種多様な基調講演やパネルディスカッションが行われました。中でも自分が印象に残ったもの（身近に感じたもの）は大学教育や研究活動におけるAIの活用に関するものでした。スイスのチューリッヒ工科大学では物理学の筆記試験の採点を支援するためにAIを導入し、採点が人間とほぼ一致していることが実証されていることを知りました。また、Google社員の基調講演ではAIチャットサービスである「Gemini」やAIツールである「NotebookLM」を活用することで、これまで膨大な時間を費やしていた文献調査やそれをまとめる作業を短時間で効率的に行うことができることを述べていました。その際の質問では、「学生が物事を考える必要がなくなるのではないか」「考える力がなくなるのではないか」といった懸念が挙げられており、活発な議論が行われていました。この問題について、私は「知識を記憶し続ける力は低下する（知識量はAIに勝ることはない）、いっぽうで膨大な知識をAIにどのように分類わけさせ、どのような情報をどのように抽出させ、それをどう活かすかという考える力がより向上する（あるいはそのような人間が勝ち残れる）」と考えています。他の講演も同様に様々な問題を提供してくれる非常に有意義なものばかりでした。

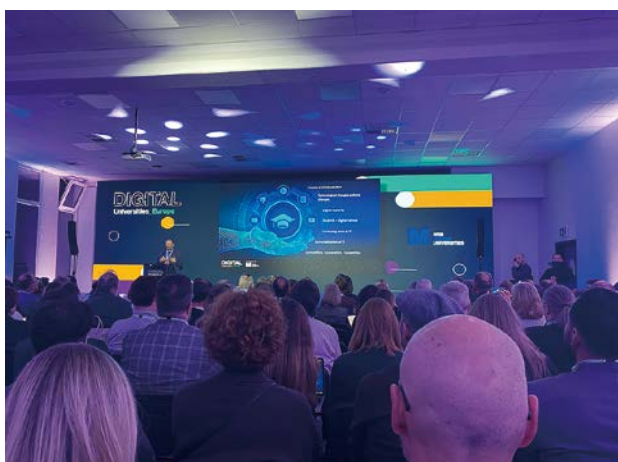


写真3 基調講演の様子



写真4 集合写真

4. おわりに

本イベントでは、貴重なお話を聞いたり、日本では出会えない人々と繋がったりすることができました。また、私は海外に行くこと自体が初めての経験でしたので、知覚するもの全てが新鮮で刺激的でした。あらゆる部分を日本と比較し、日本のいい部分も悪い部分もたくさん知ることができました。本イベントの参加に際して次世代研究者挑戦的研究プログラムにおける「キャリア開発・育成コンテンツ」として旅費を支援していただきましたこと心より感謝申し上げます。今後もこのようなイベントに参加させていただきたいと考えております。

トップオブトップアカデミー 2025 参加報告書

室蘭工業大学大学院 博士後期課程 工学専攻先端情報電子工学コース 3 年
波動エレクトロニクス研究室 谷口 美緒
(次世代研究者挑戦的研究プログラム生)

1. はじめに

2025年 3 月10日 から 3 月12日 にかけてPoland Wroclaw WSB Merito Universityにて行われたDigital Universities Europe 2025に次世代研究者挑戦的研究プログラム生の一人として参加してきました。Digital Universities Europe 2025はデジタル技術やArtificial Intelligence (AI) と教育をテーマに、これから到来する新しい教育と学習の未来に向けて必要な倫理的行動規範を考えていくため、基調講演、パネルディスカッション、ワークショップなどに参加しながら、他機関の参加者との密な情報交換を行うフォーラムです。本報告書では、Digital Universities Europe 2025に参加するまでの準備の様子、イベント概要所見、その他に私自身が実際に歩いたPoland Wroclawという街について報告致します。



写真 1 : Poland Wroclaw 駅構内にて



写真 2 : Poland Wroclaw 夕暮れの景観

2. 室蘭からポーランドへ

2 月中旬にトップオブトップアカデミー2025参加メンバーの顔合わせがあり、そこから航空券やホテルの手配、Digital Universities Europe 2025やPolandについての情報収集を開始しました。所属も研究テーマも国籍も異なるメンバーとのやり取りは最初は戸惑いも多かったですが、ただ、フットワークの軽い幾島さん、海外出張について知識の豊富なYuanさん、英語が堪能でコミュニケーション能力の高いWenさん、それぞれの長所を活かしながら準備していく中で、4 人の間でのコミュニケーションも円滑に進むようになってきたと思います。

3. Digital Universities Europe 2025

Digital Universities Europe 2025では 3 月10日にOpening night reception、3 月11,12日は基調講演、パネルディスカッション、ワークショップが行われました。Opening night receptionやランチ、コーヒープレイクでは、他の参加者との交流が楽しめました。特に、Poznanの大学の方がとてもフレンドリーで、私が拙い英語で話しかけても会話を繋げてくれ



写真 3 : Poland Wroclaw レストランにて



写真 4 : Wenと私で顔ハメ

ました。2日目は興味のあるセッションを積極的に聴講しましたが、分野や言語の壁で理解が難しいものが多かったため、3日目は参加型のワークショップを中心に参加しました。特に印象に残ったワークショップはInspiraのIshan Kolhatkar氏による「Exploring the reality of AI in education: What do educators really want from AI?」で、教育者が本当にAIを必要としているかを考えるものでした。他のセッションでも見かけたように、教育者は負荷を減らしていくためにもある程度のAIの使用は許容して行くほうがいいのでは？というところが参加者の多数の意見であるように感じました。私自身も不肖ながら、苫小牧高専にて非常勤講師として教鞭を取っているため、世界中から参加しているの教育に関わる方の意見を聞くことができ非常に参考になりました。



写真 5 : Opening night receptionの様子



写真 6 : Inspiraのワークショップの様子



写真 7 : 会場にて皆と記念撮影



写真 8 : WSB Merito University構内

4. Poland Wroclawを歩いてみて

3月10日はOpening night receptionが夕方から開始だったため、日中は太田教授を含めて5人でPoland Wroclawという街を歩いてきました。石畳の敷かれた美しい街並みを歩くと、自分が異国にいることを感じ気分が高揚しました。北のベネチアと呼ばれるトゥムンキ島エリアは静かな雰囲気の中で、洗礼者ヨハネ大聖堂の中は無宗教者の私も身の引き締まる空気が漂っていました。

5. おわりに

Digital Universities Europe 2025では興味深い講演の聴講及びワークショップに参加することができ、これからの教育・研究活動に有益な情報を得ることができました。Digital Universities Europe 2025への参加に際して、次世代研究者挑戦的研究プログラムにおける「キャリア開発・育成コンテンツ」として参加費・及び旅費を支援していただいたことに心より感謝申し上げます。加えて、副学長、コンピュータ科学センター長としてお忙しい立場であるにも関わらず、私達4人のサポートにお時間を割いて下さった董教授や太田教授にこの場を借りて、お礼申し上げます。私達の後に続く後輩たちにも、「キャリア開発・育成コンテンツ」への積極的な参加を促し、世界を見てきてほしいと思っております。

トピックス

クモの糸の粘着力の秘密を解明 —自然界に存在する「天然イオン液体」の発見—

室蘭工業大学大学院工学研究科趙越准教授、豊田工業大学レーザ科学研究室藤貴夫教授、工学院大学先進工学部坂本哲夫教授らは、クモの巣の粘着物質に含まれる未知の「天然イオン液体」を発見しました。本研究成果は、2025年3月11日、米国化学会（ACS）刊行の「Langmuir」誌に掲載されました。

研究のポイント

クモの巣の粘着成分には、これまで知られていなかった「天然のイオン液体（※1）」が含まれていることを発見しました。このイオン液体は、水和リン酸二水素コリンであり、粘着成分の中でタンパク質の溶解を助け、クモの巣の高い粘着力を生み出していることが明らかになりました。本研究では、飛行時間型二次イオン質量分析（TOF-SIMS）（※2）や中赤外ハイパースペクトルイメージング（※3）などの最先端の手法を用いて、粘着成分の化学成分の分布を詳細に可視化しました。この発見は、バイオ接着剤や新しい機能性材料の開発への応用が期待されます。

研究の概要

クモの巣は優れた粘着性を持ち、獲物を捕らえるための巧妙な仕組みを備えています。本研究では、クモの巣の粘着成分（粘球）（※4）の構成成分を詳しく調査し、その中にイオン液体として機能する化合物が含まれていることを明らかにしました。特に、水和リン酸二水素コリンがタンパク質の溶解を促進し、粘着成分の粘性や硬化を制御する重要な役割を果たしていることが分かりました。これにより、クモの粘着成分が環境の変化に適応し、優れた接着性を発揮するメカニズムを新たに解明しました。

研究の内容

本研究では、クモの粘着物質の化学成分の分布とその役割を明らかにするため、飛行時間型二次イオン質量分析（TOF-SIMS）（※2）および中赤外ハイパースペクトルイメージング（※3）を用いた詳細な分析を行いました。その結果、粘着物質には水和リン酸二水素コリンが含まれており、これがイオン液体として機能していることを突き止めました。このイオン液体は、粘着物質の中のタンパク質を溶解する働きを持ち、クモの糸が獲物に付着した後に水分が蒸発することで、その濃度が変化し、結果としてタンパク質の硬化が促進されることが分かりました。

クモの巣の粘着メカニズムは、環境に応じて粘着性を調整する高度なシステムです。図1に示すように、粘着物質が獲物や物体と接触すると、その表面積が急速に広がり、水分が蒸発します。この過程で、液体中の水和リン酸二水素コリンがイオン液体として機能し、タンパク質を溶解して柔軟な状態を保ちます。しかし、水分が蒸発すると、イオン液体の濃度が変化し、タンパク質が硬化して粘着力が強化されます。このダイナミックな応答により、クモの巣は高い粘着力を発揮し、獲物をしっかりと捕えることができます。また、粘着物質から水和リン酸二水素コリンを除去する実験を行ったところ、タンパク質が水に溶けにくくなり、硬化した状態で残ることが確認されました。このことから、水和リン酸二水素コリンが粘着物質の粘度や硬化プロセスを調節し、クモの糸の優れた粘着性を支える重要な要素であることが明らかになりました。さらに、イオン液体の存在がクモの粘着物質の均一な分布とその環境応答性に寄与していることも示されました。

これらの成果により、クモの巣の粘着物質は単なるタンパク質と水の混合物ではなく、天然のイオン液体を含む高度に制御された接着システムであることが判明しました。この発見は、自然界の接着メカニズムの理解を深めるだけでなく、新しいバイオ由来の接着剤や機能性材料の開発にも貢献する可能性を示しています。

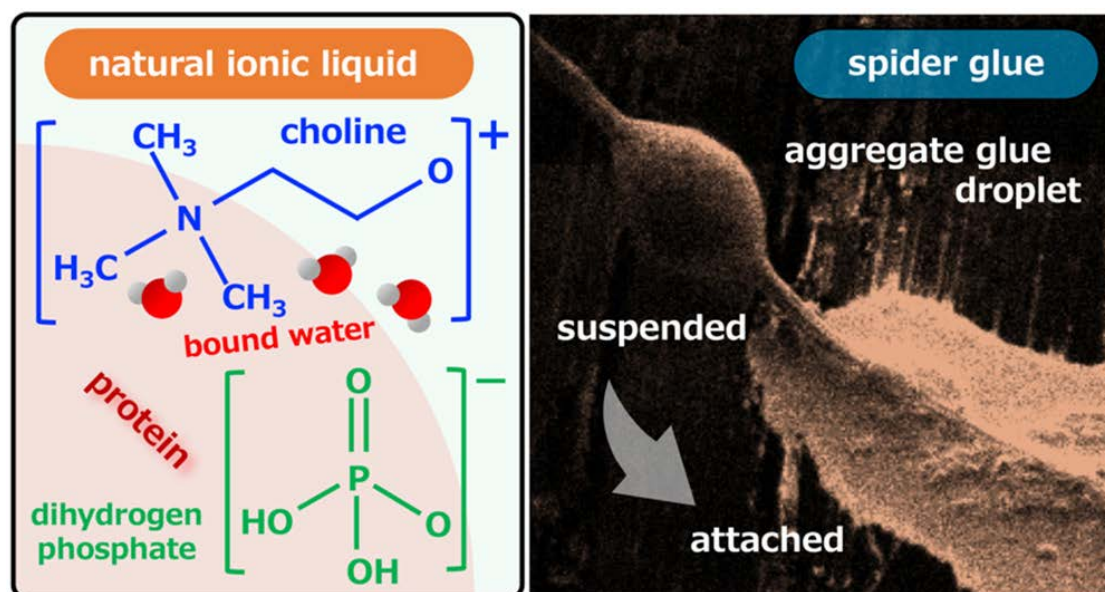


図1. 水和リン酸二水素コリンは、クモの粘着物質の中でイオン液体として機能し、タンパク質の溶解を助けます。粘球は基板との接触前には球状の液滴として存在し、均一な構造を保っていますが、基板に粘着すると液滴が広がり、水分の蒸発に伴って内部のタンパク質が硬化し、強い接着力を発揮します。

今後の展望

本研究で発見された「天然のイオン液体」は、生物が持つ高度な接着機構の解明に貢献するだけでなく、バイオ由来の新しい粘着剤の開発やバイオポリマーの加工技術、さらにはバッテリー電解質の開発など、多方面への応用が期待されます。

論文情報

論文名：Revealing the Hidden Natural Ionic Liquids in Spider Glue: Insights from the Adhesion Process

雑誌：Langmuir

著者名：Yue Zhao*, Takao Fuji, and Tetsuo Sakamoto (*責任著者)

DOI： <https://pubs.acs.org/doi/10.1021/acs.langmuir.4c05288>

研究助成

本研究は、科学研究費助成事業（JP21K14556）、大学共同利用機関法人自然科学研究機構新分野創成センター先端光科学研究分野プロジェクト（01212208, 01212306）、および科学技術振興機構戦略的創造研究推進事業（CREST）（JPMJCR17N5）の助成を受けて実施されました。

用語解説

※1 イオン液体

イオン液体とは、常温またはそれに近い温度で液体の状態を保つイオンのみで構成された塩の総称です。一般的な塩（例えば食塩）は高温でなければ溶融しませんが、イオン液体は低温でも液体のまま存在する特性を持っています。イオン液体は揮発性が低く、優れた溶媒特性や電気伝導性を持つため、電池や触媒、バイオマテリアルなど幅広い分野で応用されています。本研究では、クモの巣の粘着物質に水和リン酸二水素コリンが含まれており、これがタンパク質を溶解する「天然のイオン液体」として機能していることを発見しました。

※2 飛行時間型二次イオン質量分析（TOF-SIMS）

飛行時間型二次イオン質量分析（Time-of-Flight Secondary Ion Mass Spectrometry, TOF-SIMS）は、試料の表面にイオンビームを照射し、放出された二次イオンを検出することで、表面の元素や分子を高感度に分析する手法です。TOF-SIMSでは、飛行時間型質量分析（TOF）を用いることで、質量の異なるイオンが飛行する時間差を測定し、試料中の化

トピックス

学成分を特定できます。本研究では、クモの粘着物質に含まれる低分子化合物やタンパク質の分布を詳細に可視化するためにTOF-SIMSを活用しました。

※3 中赤外ハイパースペクトルイメージング

中赤外ハイパースペクトルイメージング（Mid-Infrared Hyperspectral Imaging）は、試料に中赤外光（波長 3 ～20 μm ）を照射し、吸収スペクトルを高解像度で測定することで、化学成分の空間分布を可視化する手法です。従来の赤外分光法と異なり、多波長のデータを同時に取得できるため、試料の成分を詳細に解析できます。本研究では、クモの粘着物質の分子レベルでの構造や化学的变化を調べるために、この手法を用いました。

※4 粘球（Aggregate Glue Droplet）

粘球とは、クモの巣の捕獲糸に形成される微小な粘着液滴のことです。クモが分泌する粘性のある液体が、表面張力の作用で球状の構造を形成し、獲物が接触すると広がって強力な接着力を発揮します。

本研究では、この粘着物質が「天然のイオン液体」を含んでいることを明らかにし、その成分と接着メカニズムを詳しく解析しました。

M-COINSが香川大学DXラボと学生交流会を実施

令和6年12月17日(火)にM-COINS（デジタル・キャンパス推進スチューデントアンバサダー）と香川大学DXラボのメンバーとのオンライン学生交流会を本部棟3階の経営企画課で実施しました。

香川大学DX ラボは、教職員、学生及び民間企業出身者によって構成されたチームで、ローコード/ノーコードツールを活用した落とし物管理システムや電子決裁システム、科研費申請問い合わせ対応チャットボットなどの業務システムの内製開発を通じて、大学内の業務改善に取り組んでいます。

交流会では、M-COINSからこれまでの活動状況や現在作成を進めている図書館個室予約アプリ及び落とし物

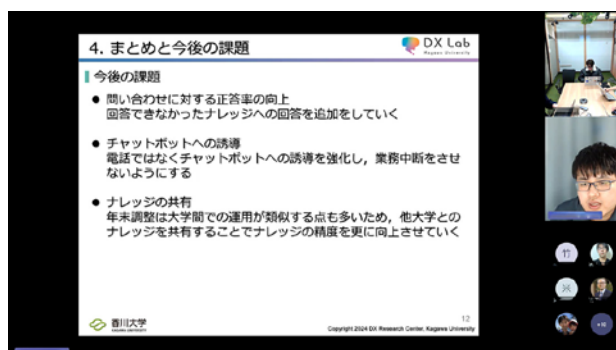
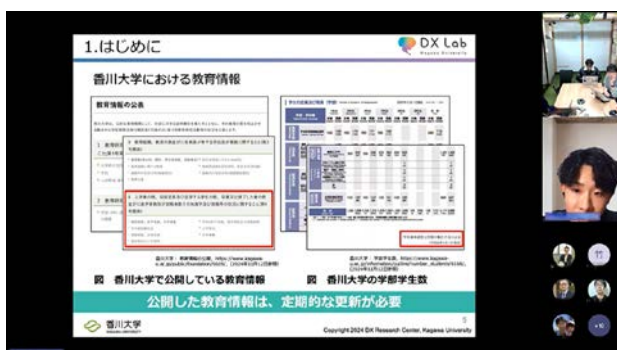
管理アプリについて発表を行いました。また、香川大学DXラボからは、大学ダッシュボード（教育）、年末調整問い合わせ対応チャットボット及び予実管理ダッシュボードの内製開発についての発表がありました。それぞれの発表に対して、活発に質疑応答が行われる等、今後の活動に資する非常に有意義な時間となりました。

本学は、学内のみならず他大学との交流及び情報交換を通じて、さらなるDXの推進に努めてまいります。

○香川大学DXラボについての詳細は[こちら](#)からご覧ください。



交流会に参加したM-COINSメンバー



香川大学DX ラボのメンバーによる発表

さががけワークショップを開催

令和7年3月17日(月)に教育・研究1号館A棟A304講義室にて、5Gで活用された技術と成果を振り返り、次世代6Gの実現に向けた超次元的情報通信技術の可能性を探る、さががけワークショップを開催しました。午前中は対面による講演、午後は完全オンラインで行われました。

ワークショップの冒頭、本学コンピュータ科学センター長の太田教授が、本センターのビジョン、そして、今回のワークショップでの活発な議論を通じて関係性を築くことや共同研究の機会を得ることを望むという趣旨の挨拶をしました。

また、本学の「次世代研究者挑戦的研究プログラム」事業に係る博士後期課程の学生も参加し、積極的に研究者に質問をするなど、自身の研究に関する意見交換を活発に行っていました。



太田センター長による挨拶



Prof. Saewoong Bahk (Seoul National University)
による講演



ワークショップ参加者との集合写真



Prof. Abbas Jamalipour (University of Sydney)
による講演



質問をする本学学生



Prof. Ai-Chun Pang (National Taiwan University)
による講演

また、午後にはシドニー大学教授Abbas Jamalipour氏、国立台湾大学教授Ai-Chun Pang氏、ニューサウスウェールズ大学教授Jinhong Yuan氏が松田学長を表敬訪問しました。

冒頭に、松田学長は来賓によるワークショップ参加を歓迎し、本ワークショップが世界の通信技術における画期的な進歩となるよう、今回の表敬訪問を通じて将来的な連携強化に向けた前向きな意見交換が行われました。



Prof. Jinhong Yuan (University of New South Wales)
による講演



意見交換会の様子



集合写真
後列左から、谷口特定専門職員、坂本准教授、董副学長、太田センター長
前列左から、Pang氏、松田学長、Jamalipour氏、Yuan氏

【参加者】

Saewoong Bahk, Professor, Seoul National University

Abbas Jamalipour, Professor, the University of Sydney

Ai-Chun Pang, Professor, National Taiwan University

Jinhong Yuan, Professor, the university of New South Wales

Yang Xiang, Professor, Swinburne University of Technology

Zhisheng Niu, Professor, Tsinghua University

Dusit Niyato, Professor, Nanyang Technological University

Geyong Min, Professor, the University of Exeter

董 冕雄 室蘭工業大学 副学長・教授

太田 香 室蘭工業大学 コンピュータ科学センター長・教授

李 鶴 室蘭工業大学 准教授

徐 建文 室蘭工業大学 助教

公立千歳科学技術大学×室蘭工業大学コンピュータ科学センター 半導体ワークショップを開催

令和 7 年 3 月 18 日 (火) に教育・研究 1 号館 A 棟 A 304 講義室において「公立千歳科学技術大学×室蘭工業大学コンピュータ科学センター半導体ワークショップ」をハイブリッド形式で開催し、オンライン参加者を含む約 70 人が参加しました。

本学佐藤理事の開会挨拶に始まり、本学からは徐助教の「次世代半導体技術がもたらす AI の可能性～半導体の進化が切り拓く新たな AI の未来～」、李准教授の「次世代半導体が加速するエッジ AI の進化」、公立千歳科学

技術大学からは、大島准教授の「次世代半導体の高性能化を支える 3 次元実装・チップレット技術」と題したご講演をいただきました。

本学の「次世代研究者挑戦的研究プログラム」事業に係る博士後期課程の学生も参加し、会場からは多くの質問が出て、講師陣との交流も大変有意義なものとなりました。最後に、公立千歳科学技術大学の鈴木副学長の閉会挨拶により半導体ワークショップは盛況のうちに閉会しました。



参加者記念写真



本学 佐藤理事による開会挨拶



本学 徐助教による講演



本学 李准教授による講演



公立千歳科学技術大学 大島准教授による講演



公立千歳科学技術大学 鈴木副学長による閉会挨拶

公益社団法人土木学会北海道支部のYouTubeに むろこーほーが出演

公益社団法人土木学会北海道支部が担い手不足が危ぶまれる土木業界を盛り上げるため、土木業界関係者（本学の浅田准教授が企画担当）による土木エンターテインメント企画し、動画を制作しました。

今回公開された動画は「IKINARI THE DOBOKU」と題し、室蘭工業大学学生広報スタッフ「むろこーほー」

のパーカーさんが出演、土木の役割や魅力などをたっぷり伝えております。皆様、是非動画をご覧ください。

YouTube 【IKINARI THE DOBOKU】

【いきなり THE 土木】

<https://youtu.be/01jvHq-OIGI>

室蘭工業大学公認サークルSARDが 「Today at Apple」に登壇し野口聡一宇宙飛行士と対談

令和7年3月20日(木)にApple表参道で開催された「Today at Apple」に本学の公認サークル[学生宇宙研究開発機構SARD](#) (Student Aerospace Research & Development project) の学生が登壇し、宇宙開発とテクノロジーをテーマにしたセッションで野口聡一宇宙飛行士と対談いたしました。

【参加学生よりメッセージ】

《SARD 沖優昌さん》

「実際に宇宙に行った経験を持つ野口聡一さんのお話を直接聞くことができ、私たちが果たすべき役割や可能性を改めて実感しました。様々な角度から世界の宇宙開発に最大限貢献して、近い内に火星に行けるよう尽力していきたいです。」

《SARD 鳥杏成さん》

「今回の対談を通じて、リーダーの在り方に対する意識が大きく変わりました。リーダーの役割は、メンバーをまとめるだけでなく、全員が同じ目標に向かって進むための道しるべを示すことだと気づかされました。今後、サークルや自分自身が成長するためにも、この対談で得た学びを活かしていきたいと思っています。」

《SARD 原航陽さん》

「イベントを終えて、これまで多くの方々が僕に与えてくださった「夢を追いかけることの素晴らしさ」や「宇宙への好奇心・魅力」を、今度は自分が少しでも誰かに届けることができたのではないかと感じ、深く考えさせられました。

このような貴重な経験をさせていただけたことに、関わってくださったすべての皆さまへ心から感謝の気持ちでいっぱいです。

今回、僕が登壇という貴重な機会をいただけたのも、これまでSARDの歴史を築き上げてくださった先輩方のおかげです。

もうすぐ僕も2年生となり、後輩ができます。今の先輩方のように、後輩に憧れられる存在になれるよう、努力していきます。

これからも仲間とともに、このイベントで得た経験とインスピレーションを胸に、一生懸命、宇宙を目指して進んでいきます！」

《SARD代表 神岡凜星さん》

「野口さんのプロジェクトではメンバーのベクトルを合わせることが重要だという話、大変に勉強になりました。また、急遽ご質問の機会を頂けたり、貴重な経験を本当にありがとうございました。」



野口聡一宇宙飛行士とSARD 原航陽さん



拍手を受けるSARDメンバー
(左より鳥杏成さん、沖優昌さん、原航陽さん、神岡凜星さん)

辻 寧英教授が電子情報通信学会からフェロー称号を授与

令和7年3月24日(月)～28日(金)に開催された電子情報通信学会総合大会のプレナリーセッションにおいて、本学の辻教授(もの創造系領域)が電子情報通信学会(IEICE)から「フェロー(Fellow)」の称号を授与されました。電子情報通信学会は電子・情報・通信・エレクトロニクス分野を担う日本最大の国際学会です。フェロー称号は「電子情報通信学会への貢献が大でかつ学問・技術または関連する事業に関して功績が認められる正員に対して授与する」と規定されています。

【受賞者コメント】

今回の電子情報通信学会フェローの表彰は、研究室の学生および学会等でお世話になった多くの先生方のご支援のおかげです。この場を借りて皆様に御礼申し上げます。今後も学会活動を通じて、電子・情報・通信分野、そして日本全体の発展に貢献していきたいと思っています。本学の学生がより高いレベルで学業・研究に取り組み、将来の日本の発展に貢献してくれることを願って、教育・研究に取り組んでいきたいと思っています。



フェロー称号を授与された辻教授



贈呈された盾と記念品

令和 6 年度学位記授与式を挙行

令和 7 年 3 月 24 日 (月) に学位記授与式を挙行了しました。

○各学位授与者数

・理工学部第 3 回学位記授与者	546 名
・工学部第 73 回学位記授与者	4 名
・大学院博士前期課程第 59 回学位記授与者	231 名
・大学院博士後期課程第 33 回学位記授与者	12 名



学位記授与式の様子

令和7年度入学宣誓式を挙行

令和7年度入学宣誓式を4月4日(金)に挙行了しました。

○各入学者数

・理工学部学士課程入学者数	642名
・編入学者数	44名
・大学院博士前期課程入学者数	224名
・大学院博士後期課程入学者数	11名



入学宣誓式の様子

PRESTO Workshop ~Achievements and Future Prospects~を開催

令和 7 年 3 月 28 日(金)、31 日(月)に教育・研究 8 号館 R棟R205講義室にて、5 Gで活用された技術と成果を振り返り、次世代 6 Gの実現に向けた超次元的情報通信技術の可能性を探る、PRESTO Workshop ~Achievements and Future Prospects~を開催しました。28日は対面とオンラインによるハイブリッド形式の講演、31日は完全

オンラインで行われ、盛況のうちに終了しました。

ワークショップの冒頭、太田センター長より、現在進行中のプロジェクトの概要、および将来に向けたビジョンが述べられました。本学の多くの学生がこの機会を活用し、積極的に意見交換を行いながら、自身の研究の向上を図るために意欲的に参加していました。



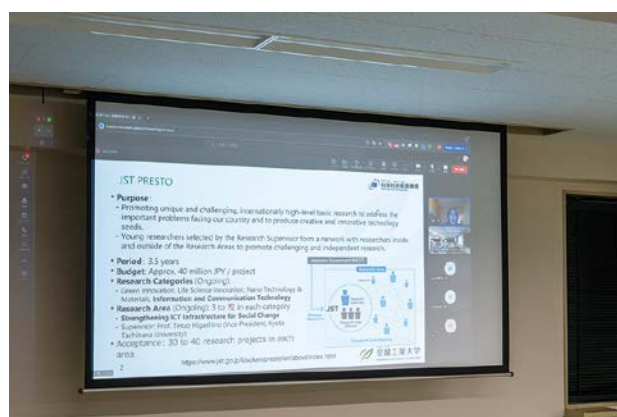
Prof. Yuguang Fang (City University of Hong Kong) による講演



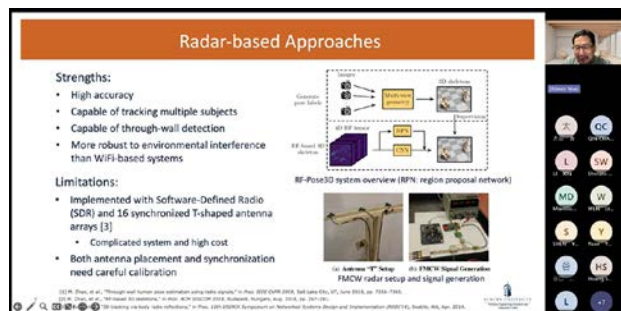
質問をする本学学生



Prof. Jie Wu (Temple University) による講演



本学太田センター長による講演



Prof. Shiwen Mao (Auburn University) による講演



Prof. Weizhi Meng (Lancaster University) による講演



ワークショップ参加者と記念撮影

【参加者】

Yuguang Fang, Chair Professor, City University of Hong Kong

Jie Wu, Professor, Temple University

Shiwen Mao, Professor, Auburn University

Weizhi Meng, Professor, Lancaster University

董 冕雄 室蘭工業大学 副学長・教授

太田 香 室蘭工業大学 コンピュータ科学センター長・教授

徐 建文 室蘭工業大学 助教

本学学生が日本音響学会第153回研究発表会において 学生優秀発表賞を受賞

令和 7 年 3 月 18 日 (火) に、埼玉大学で開催された日本音響学会第153回研究発表会において、本学大学院生 藤岡夕大さんが、第152回 (2024年) 秋季研究発表会で行った講演に対して学生優秀発表賞を受賞しました。学生優秀発表賞は、平成21年に創設された賞で、将来の音響学の発展を担う若手研究者を奨励するため、春季又は秋季研究発表会において優秀な発表を行った学生会員に贈呈されます。

【受賞内容】

第152回 (2024年秋季) 研究発表会 学生優秀発表賞
藤岡夕大 (青柳学研究室 大学院博士前期課程 1 年
情報電子工学系専攻電気電子工学コース)

講演題目：平面上に置かれた穴付き円筒に作用する超音波浮揚力の検討

日本音響学会第152回 (2024年秋季) 研究発表会 (令和 6 年 9 月 4 日)

共同研究者：Wang Yimeng、田村英樹、青柳教授

【受賞者のコメント】

この度、日本音響学会2024年秋季研究発表会での発表で学生優秀発表賞を受賞することができ、大変光栄に思います。本賞を受賞できたのは、青柳学教授をはじめとする多くの方々のご指導とご支援のおかげだと思っています。心より感謝申し上げます。この経験を励みに、今後もより一層研究活動に精進していきたいと思っています。



学生優秀発表賞を受賞した藤岡さん



表彰状

M-COINSが新入生オリエンテーションで 新規メンバーを募集

令和7年4月4日(金)に本学体育館で行われた新入生オリエンテーションでM-COINS（デジタル・キャンパス推進スチューデントアンバサダー）のメンバーが新規メンバー募集に関する発表を行いました。

M-COINSとは、本学のデジタル・キャンパスの実現に向けた取組を促進するために令和5年度に創設された「デジタル・キャンパス推進スチューデントアンバサダー」制度に応募し、任命された学生のチームです。

当日はメンバーの竹内大訓さん（創造工学科4年）が体育館の壇上で発表を行い、新入生は入学宣誓式後に配布された資料からQRコードを読み取り、自分のスマー

トフォンから発表資料を確認しながら説明を聞いていました。また、発表時間中にオンラインフォームからリアルタイムで質問を募集し、投稿された質問に対して、その場で回答しました。

なお、発表では、本学で導入しているクラウド型コンテンツ管理基盤「Box」についての説明や現在本学で導入が検討されている大学公式アプリに関すること、本学公式X（旧Twitter）での広報活動が挙げられました。

M-COINSではこれからも学生目線で大学のデジタル・キャンパス化の促進を目指して活動していきます。



発表の様子

THE日本大学ランキング2025で 121～130位にランクイン

令和7年4月3日、イギリスの高等教育専門誌Times Higher Education（以下「THE：ティー・エイチ・イー」）は「THE 日本大学ランキング2025」を発表し、本学は、総合121～130位にランクインしました。

室蘭工業大学は『真なる探究心から未来の価値づくりを。』をキャッチコピーに、延べ40,000人余の同窓生の活躍を実績として教育改革を進め、地域にそして世界に貢献できる理工系学生の育成に邁進します。

「THE 日本大学ランキング」は、THEとベネッセグ

ループが大学の教学改革やグローバル化の推進を目的に公表するランキングです。ランキング指標となる「教育リソース」、「教育充実度」、「教育成果」及び「国際性」の4分野によって大学の「教育力」を測定し、今回は257大学がランキング対象となりました。

結果の詳細は下記のURLからご覧いただけます。

<https://japanuniversityrankings.jp/rankings/>

Japan University Rankings 2025

Powered by 

特定非営利活動法人 ポロクルが 「第46回 国際交通安全学会賞（業績部門）」を受賞

特定非営利活動法人ポロクル（理事長：もの創造系領域 有村 幹治 教授）が、「第46回 国際交通安全学会賞（業績部門）」を受賞しました。

この賞は、理想的な交通社会の実現に多大な貢献を果たした業績のうち、過去3年以内に顕著な成果が認められたものを対象に選考されるものです。

今回の業績題目は「シェアサイクルで街をささえ人がそだつ ～札幌市での自転車文化の鼓動～」となっており、受賞活動は、産官学連携による交通まちづくり事業であり、本学の学生も、移動需要予測技術の開発や論文発表、ワークショップへの参加など、学術的な側面から積極的に関与しています。

ポロクルが様々なシェアサイクル関連事業を通じて地域の交通システムとして成長していくプロセスは、今後、地域交通に関する一連のまちづくり活動が、地方のまちと人を支え、はぐくむ社会システムへ昇華していく好例であり、国際交通安全学会が目指す理想的な交通社会の実現に寄与する事業として高く評価されました。

詳細につきましては以下のリンクをご参照ください。

国際交通安全学会 ホームページ

➤ <https://www.iatss.or.jp/>

特定非営利活動法人 ポロクル ホームページ

➤ https://porocle.jp/npo_porocle/about

【受賞者コメント】

このたびの受賞は、ポロクルの活動を支えてくださった市民の皆様、行政関係者、そして多くの学生や関係団体のご協力の賜物です。心より感謝申し上げます。

本事業を担う若者の中には、NPO法人ezorockのメンバーに加え、これまでに室蘭工業大学の学生も研究やワークショップを通じて参画しており、次世代の人材育成の場としても意義深い取り組みとなっています。

今後も、交通とまちづくりの接点から地域に根ざした活動を続け、持続可能な社会の実現に貢献してまいります。



受賞式の様子



贈られた賞状

情報・資料

MONOづくりみらい共創機構「プレ共同研究」(1回目)の採択

令和6年度MONOづくりみらい共創機構プレ共同研究(1回目)公募の結果、次のとおり採択されました。

本事業は、本学教員と民間機関等との研究者が、次年度以降において民間機関等との共同研究へ発展させるための前段階に相当する共同研究に対して助成を行うものです。

研究代表者・職・氏名	民間企業等	採択金額 (千円)
もの創造系領域 教 授 水 上 雅 人	日本製鋼所M&E株式会社	500
合 計 (1件)		500

令和7年度科学研究費助成事業の交付内定

《新規分》

(千円)

区分	研究代表者 所属・職・氏名	研 究 題 目	直接経費 内 定 額	間接経費 内 定 額	合計
基盤研究 (B)	もの創造系領域 教 授 関 根 ちひろ	超高压下マルチスケール構造制御によるスクッテルダイト系高性能熱電変換材料の開発	7,800	2,340	10,140
	もの創造系領域 教 授 廣 田 光 智	ピエゾのスクーバ運動最適化による新世代エコ消火の実現と音響学的消火戦略の確立	8,200	2,460	10,660
	もの創造系領域 准教授 趙 越	次世代量子計測・センシングの為に2.2~20 μ m 広帯域波長もつれ光源の開発	9,800	2,940	12,740
	もの創造系領域 助 教 川 口 悟	データから微分方程式を発見する機械学習による電子輸送係数データセットの獲得	10,100	3,030	13,130
	しくみ解明系領域 助 教 泉 佑 太	マルチモーダルSARセンシングが拓く橋梁ヘルスマonitoringの実現	7,000	2,100	9,100
基盤研究 (C)	もの創造系領域 准教授 浅 田 拓 海	地震被災道路の路面復旧効率化にむけた道路デジタルツイン技術の構築	1,600	480	2,080
	もの創造系領域 准教授 境 昌 宏	CFRPとアルミニウムとの接触腐食を利用した新規水素製造方法の開発	1,300	390	1,690
	もの創造系領域 准教授 佐 藤 信 也	光ファイバセンサとAIを用いたのり面・建築構造物の歪み監視システムの開発	1,600	480	2,080
	もの創造系領域 准教授 成 田 幸 仁	表面き裂進展に着目したトラクションドライブの転がり疲労寿命とそのばらつきの予測	1,200	360	1,560
	しくみ解明系領域 教 授 中 野 英 之	光誘起物質移動現象の機構解明と持続的光メカニカルシステムの開拓	1,800	540	2,340
	しくみ解明系領域 准教授 神 田 康 晴	貴金属触媒のリン化による選択的水素化脱硫反応活性の向上とメカニズム解明	2,200	660	2,860
	しくみ解明系領域 准教授 小 林 洋 介	音声の距離感制御アンプの試作	1,000	300	1,300

区分	研究代表者 所属・職・氏名	研 究 題 目	直接経費 内 定 額	間接経費 内 定 額	合計
基盤研究 (C)	ひと文化系領域 教 授 曲 明	協働学習としてのCOIL実践における 学生間の相互作用に関する研究	800	240	1,040
	ひと文化系領域 准教授 GAYNOR Brian, Nollaig	Investigating automatic reading skills of (L1) English children learning second language (L2) Japanese in Japan.	1,800	540	2,340
	ひと文化系領域 准教授 若 狭 恭 平	時間依存型の消散性をもつ非線形波動 方程式の統一的な理解の構築	1,000	300	1,300
若手研究	もの創造系領域 助 教 井 口 亜希人	有限要素ベースの時間領域解法を活用 した次世代光回路デバイスのための設 計基盤の構築	2,800	840	3,640
	しくみ解明系領域 助 教 徐 建 文	セマンティック通信を用いたスマート 防災IoTシステム	1,700	510	2,210
	しくみ解明系領域 助 教 寺 岡 諒	マルチモーダル感覚情報処理を活用し た「気配」ジェネレータの試作	1,400	420	1,820
合 計		18件	63,100	18,930	82,030

《継続分》

(千円)

区分	研究代表者 所属・職・氏名	研 究 題 目	直接経費 内 定 額	間接経費 内 定 額	合計
基盤研究 (B)	もの創造系領域 教 授 川 村 志 麻	砕屑岩・火山灰質土斜面の地震や気候 変動による斜面崩壊発生危険度システ ムの開発	2,900	870	3,770
	もの創造系領域 教 授 真境名 達 哉	簡易耐火造平屋建て公営住宅の住み継 ぎの可能性に関する検証と地方自治体 に与える効果	3,300	990	4,290
	しくみ解明系領域 教 授 小 野 頌 太	非層状物質の原子層エンサイクロペ ディア	1,900	570	2,470
基盤研究 (C)	もの創造系領域 教 授 有 村 幹 治	エッジ/クラウドAIによるリアルタ イム冬期道路交通移動支援プラット フォームの構築	100	30	130
	もの創造系領域 教 授 梶 原 秀 一	パラメータが周期的に変化する2点吊 り剛体振子の数理構造解明とねじれ振 動制御の試み	1,500	450	1,950
	もの創造系領域 教 授 高 瀬 裕 也	AIによる新設計法の提案を目指した 劣化・損傷・補修を複雑に経験した RC梁の力学特性	750	225	975

区分	研究代表者 所属・職・氏名	研 究 題 目	直接経費 内 定 額	間接経費 内 定 額	合計
基盤研究 (C)	もの創造系領域 教 授 中津川 誠	既存ダムの総力をあげた治水のための 流入量予測手法の普遍化	1,200	360	1,560
	もの創造系領域 教 授 花 島 直 彦	丈長植物密生地を対象とした展開脚と 螺旋機構のハイブリッド式移動機構	700	210	910
	もの創造系領域 教 授 湯 浅 友 典	酸素飽和度をクラウド検出する進化型 データベース皮膚分析システム	1,300	390	1,690
	もの創造系領域 教 授 渡 邊 浩 太	超高速数値解析&位相最適化が可能に する次世代モータ開発	500	150	650
	もの創造系領域 准教授 大 石 義 彦	多分散径分布の局所ボイド変動がもた らす空気潤滑効果のマキシマイゼー ション	700	210	910
	もの創造系領域 准教授 桑 原 浩 平	パーソナルサーマルマネジメントシス テムに適用可能な平均皮膚温予測モデ ルの開発	800	240	1,040
	もの創造系領域 准教授 後 藤 芳 彦	有珠山の次期噴火予測と火山防災：洞 爺カルデラと有珠山の全噴火史解明	900	270	1,170
	もの創造系領域 准教授 佐 藤 孝 洋	確率共振の活用による浮体式波力発電 システムの高稼働率化	600	180	780
	もの創造系領域 准教授 立 山 耕 平	衝撃負荷に対して柔軟性を発揮する" 壊れない複合材料"の創成	1,900	570	2,470
	もの創造系領域 准教授 永 井 宏	埋戻し土の不確実性が新設杭の周面抵 抗に及ぼす影響の解明と周面抵抗力の 算定法の構築	700	210	910
	もの創造系領域 准教授 船 水 英 希	ディープAIホログラフィックフロー サイトメトリによる血液診断法の創出	800	240	1,040
	もの創造系領域 准教授 溝 端 一 秀	クランクトアロー超音速機形状の動的 空力にかかる周囲流れの空間的・時間 的メカニズム	300	90	390
	もの創造系領域 准教授 湊 亮二郎	再使用型宇宙輸送システムのための逆 行流エアインテーク空力性能に関する 研究	700	210	910
	もの創造系領域 助 教 佐々木 大 地	金属の短寿命化促進条件の探索：非鉛 系圧電セラミックス作製法創製に向け て	300	90	390
	もの創造系領域 助 教 高 橋 一 弘	水溶液へのパルス放電プラズマ照射に おける水中の特異な流動機序の解明	1,000	300	1,300

区分	研究代表者 所属・職・氏名	研究題目	直接経費 内定額	間接経費 内定額	合計
基盤研究 (C)	しくみ解明系領域 教授 戎 修 二	希土類硫化物が示す特異物性の起源解明と準安定状態制御・積極利用による巨大物性応答	700	210	910
	しくみ解明系領域 教授 岡 田 吉 史	心電図を用いて多種類の心疾患の識別を実現する軽量な深層学習モデルの開発	700	210	910
	しくみ解明系領域 教授 亀 川 厚 則	貴金属触媒を凌駕する超効率アンモニア合成の為の非貴金属/希土類水素化物触媒の開発	700	210	910
	しくみ解明系領域 教授 CHANG Young-Cheol	芳香族・脂肪族塩素化合物を完全分解する微生物コンソーシアムとPHB生産方法の確立	800	240	1,040
	しくみ解明系領域 教授 董 冕 雄	デジタルツインとドローンによる避難支援システムの研究	1,000	300	1,300
	しくみ解明系領域 教授 徳 樂 清 孝	変性タンパク質凝集が引き起こす細胞恒常性破綻機構の統合的理解とその抑制物質の探索	1,200	360	1,560
	しくみ解明系領域 教授 中 野 博 人	創薬に向けた光学活性スピロオキシインドールの多成分触媒を用いない不斉合成法の開発	900	270	1,170
	しくみ解明系領域 教授 庭 山 聡 美	対称ジエステルの環境に優しいモノ加水分解反応のメカニズム解明と高分子合成への応用	700	210	910
	しくみ解明領域 教授 山 中 真 也	炭酸カルシウムの形態と機能の総合的理解と新機能の開拓	900	270	1,170
	しくみ解明系領域 教授 吉 田 雅 典	嚥下困難の程度を身体に優しい検査により評価して合理的に安全な嚥下補助を実現する	1,100	330	1,430
	しくみ解明系領域 准教授 雨 海 有 佑	可逆的アモルファス→アモルファス転移に伴う巨大な熱膨張現象の解明	700	210	910
	しくみ解明系領域 准教授 柴 山 義 行	ウェルコントロールな量子渦による量子流体のダイナミクスの解明	400	120	520
	しくみ解明系領域 准教授 高 岡 旭	幾何的交差グラフに関するアルゴリズム的研究	600	180	780
	しくみ解明系領域 准教授 李 鶴	超低消費電力IoTシステムの研究開発	900	270	1,170
	ひと文化系領域 教授 上 村 浩 信	異なる運動タイプを弁別可能なニオイセンシングシステムの開発	100	30	130

区分	研究代表者 所属・職・氏名	研 究 題 目	直接経費 内 定 額	間接経費 内 定 額	合計
基盤研究 (C)	ひと文化系領域 教授 清 末 愛 砂	離婚手続時の養育プログラムの制度設計に関する政策提言－アジア地域における比較研究	700	210	910
	ひと文化系領域 教授 桑 田 喜 隆	生成系AIを活用したJupyter Notebookのプログラミング演習に関する研究	600	180	780
	ひと文化系領域 教授 塩 谷 亨	ポリネシア諸語における同系の前置詞の用法の対応及び差異に関する対照研究	300	90	390
	ひと文化系領域 教授 高 橋 雅 朋	一般枠付き曲面論の構築とローレンツ・ミンコフスキー空間への応用	800	240	1,040
	ひと文化系領域 教授 森 田 英 章	離散構造に付随するゼータ関数の基礎理論と応用に向けた展開	800	240	1,040
	ひと文化系領域 准教授 阿知良 洋 平	平和学習におけるヒューマンイズムの再考	600	180	780
	ひと文化系領域 准教授 小 野 真 嗣	既存英語語彙表の再活用に向けたユーザビリティ尺度による有効性測定と満足度調査	1,000	300	1,300
	ひと文化系領域 准教授 三 村 竜 之	フィールドワークと文献調査によるノルド諸語のアクセント消失と変化に関する基礎研究	200	60	260
挑戦的研究 (萌芽)	もの創造系領域 教授 廣 田 光 智	熱可逆性ゲル水溶液を起爆で散布する広域森林火災用消火カプセルの開発とその最適化	1,100	330	1,430
	しくみ解明系領域 教授 岸 本 弘 立	極超音速機に向けたホウ化ジルコニウム - 炭化ケイ素断熱モジュール要素の試作	2,300	690	2,990
	もの創造系領域 教授 青 柳 学	超音波ホモジナイザーの劇的性能UP アタッチメント:音響流ジェット・ブラスターの開発	700	210	910
挑戦的研究 (開拓)	しくみ解明系領域 准教授 葛 谷 俊 博	希薄添加元素を活かす自動車廃ガラスのアップサイクリング	5,000	1,500	6,500
若手研究	もの創造系領域 准教授 KIM JIHOON	乾燥/再湿潤環境下におけるコンクリート耐久性評価: ナノスケールでの水分挙動解明	900	270	1,170
	もの創造系領域 助教 瓦 井 智 貴	終局状態を考慮した落石荷重を受けるFRP補強RC梁に関する耐衝撃設計手法の開発	600	180	780

区分	研究代表者 所属・職・氏名	研 究 題 目	直接経費 内 定 額	間接経費 内 定 額	合計
若手研究	もの創造系領域 助教 莊 司 成 熙	不可視ガス流量計測のための光音響ブロープによる完全非侵襲流速分布計測法の実現	1,100	330	1,430
	しくみ解明系領域 助教 鈴木 元 樹	コーチングのための多種スポーツ匠AI基盤による協調的フィードバック技術の開発	900	270	1,170
	ひと文化系領域 准教授 石 川 彩 香	グラフゼータを基軸とする離散構造上のゼータ関数の行列式表示	900	270	1,170
	ひと文化系領域 准教授 可香谷 隆	動的接触角構造を伴う平均曲率流に対する幾何解析的研究	900	270	1,170
	ひと文化系領域 准教授 内 免 大 輔	臨界型非線形楕円型方程式における解の集中現象の研究-余質量を伴う集中-	700	210	910
	ひと文化系領域 准教授 白 尚 燁	サハリンエウエンキ語の記述：サハリンにおける言語接触とその歴史的変遷の解明	300	90	390
合 計		56件	54,650	16,395	71,045
総 合 計		74件	117,750	35,325	153,075

外部資金

奨学寄附金の受入れ

寄 附 者	目 的	金 額 (千円)
札幌日信電子株式会社	工 学 教 育 助 成	150
一般社団法人スマートプロセス学会	工 学 研 究 助 成	200
公益財団法人岩谷直治記念財団	工 学 研 究 助 成	3,130
株式会社伊藤工業	工 学 教 育 助 成	1,000
NJT銅管株式会社	工 学 研 究 助 成	550
MEME CORPORATION株式会社	工 学 研 究 助 成	200
益村測量設計株式会社	工 学 研 究 助 成	1,000
個人寄附者（1件）	SARD活動費のため	1,500
日本銅学会	工 学 研 究 助 成	250
電制コムテック株式会社	工 学 教 育 助 成	50
株式会社アットマークテクノ	工 学 教 育 助 成	50
日本製鉄株式会社	工 学 研 究 助 成	500
日本製鉄株式会社	工 学 研 究 助 成	500
一般財団法人北海道河川財団	工 学 研 究 助 成	1,500
合 計（14件）		10,580

人 事

人 事 異 動

国立大学法人
室蘭工業大学長発令

発令年月日	異 動 内 容	氏 名	現 職
令和 7 年 4 月17日	〈辞 職〉	植 村 好 美	大学院工学研究科 事務補佐員
令和 7 年 4 月12日	〈雇用期間満了〉	本 間 美希子	総務広報課 事務補佐員
令和 7 年 4 月 7 日	〈採 用〉 大学院工学研究科 博士研究員 大学院工学研究科 博士研究員	TAMBANG MANIK HUQ MOHAMMAD JOBAYER	

表 彰

本学名誉教授及び特任教授の岸 徳光先生が、令和 7 年春の叙勲において、瑞宝小綬章を受章しました。



岸 徳光先生は、昭和52年 3 月に北海道大学大学院工学研究科博士課程土木工学専攻を修了し、同大学より工学博士が授与され、同年 4 月に（一財）電力中央研究所土木技術研究所に研究職として着任され、昭和57年 4 月に室蘭工業大学の助教授に着任しました。その後、平成10年 8 月に同教授に昇任し、平成24年 3 月に本学を退職されるまで教育・研究に情熱を傾けるとともに、理事、副学長、教育研究等支援機構長、知的財産本部長、工学部建設システム工学科長を歴任されるなど、本学の発展のために多大な貢献をされ、平成24年 4 月に室蘭工業大学名誉教授になりました。平成24年 4 月より釧路工業高等専門学校長に着任し、平成30年 3 月に定年退職された後、平成30年 4 月から現在まで本学の特任教授として研究に励まれております。

訃 報

本学第13代学長、本学名誉教授、佐藤 一彦氏は、去る令和7年4月27日(日)にご逝去されました。

ここに、生前の功績を偲び謹んで哀悼の意を表します。

同氏は、室蘭工業大学大学院工学研究科修士課程を修了後、昭和43年8月北海道大学助手、昭和54年8月同講師、昭和55年4月室蘭工業大学助教授、昭和59年7月同教授に昇任を経て、平成20年4月室蘭工業大学名誉教授、平成21年4月室蘭工業大学学長となられ、平成30年4月に瑞宝中綬章を受章され、現在に至っておりました。

専門は資源開発工学（岩石力学、掘削工学、建設機械学）。



名誉教授
佐藤 一彦（享年83歳）

学内会議

学内各種委員会等の開催

< 3月25日～4月24日 >

開催日時 令和7年3月25日(火)

会議名 第35回役員会

開催日時 令和7年4月8日(火)

会議名 第1回企画戦略会議

開催日時 令和7年4月10日(木)

会議名 第1回教授会

開催日時 令和7年4月10日(木)

会議名 第1回大学院工学研究科博士後期課程専攻長等会議

開催日時 令和7年4月15日(火)

会議名 第1回役員会

開催日時 令和7年4月17日(木)

会議名 第2回役員会

開催日時 令和7年4月17日(木)

会議名 第1回教育研究評議会

学内行事

- 3月31日(月) 辞令交付・永年勤続表彰式及び感謝状贈呈式
- 4月1日(火) 辞令交付
- 4月1日(火) 令和7年度事務職員基礎知識習得研修
- 4月4日(金) 令和7年度入学宣誓式
- 4月7日(月) 室蘭工業大学初任教職員研修
- 4月10日(木) PRESTO Workshop ~Achievements and Future Prospects~

学外行事

- 4月12日(土) 室蘭工業大学同窓会関東支部「空閑前学長による特別講演会」(東京都)
- 4月18日(金) 令和7年度国立大学図書館協会北海道地区協会総会(札幌市)

室蘭工業大学 人物図鑑

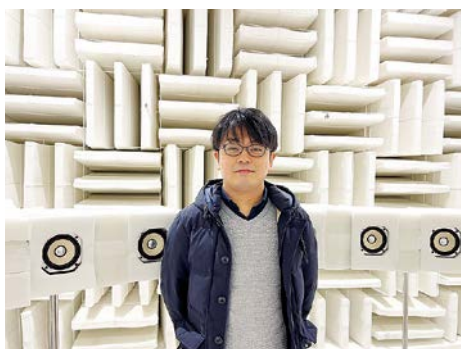
室蘭工業大学に所属する教員・職員に
専門分野、業務内容、室工大の
Good Pointなどを聞いてみました。

- ①専門・業務内容
- ②室工大のGood Point
- ③室工大で好きなspot



Part
23

助教
寺岡
諒



- ①実験心理学、バーチャルリアリティ
- ②キャンパスが緑に囲まれていて自然豊かなところ。
それでいて街からも比較的近いのも良い
- ③TENTO。いつも美味しいコーヒーとホットサンド
を出してくれる。

Part
24

助教
泉
佑太



- ①レーダリモートセンシング。
特に合成開口レーダによる災害、社会インフラリモート
センシング。
(研究室Website: <https://u.muroran-it.ac.jp/imrsl/>)
- ②異分野連携を推進しており、唯一無二の研究が多いこと。
- ③白老エンジン実験場。広大な自然に囲まれたフィールド
でのロケットエンジンや無人機の実験は圧巻。私の
研究室の実験でも度々お世話になっています。

編集後記

◆ 9月発行予定の蘭岳152号を作成中です。蘭岳は幅広い方々に向けた室工大広報誌で主なターゲットは同窓生です。室蘭工業大学の現在の研究・教育の強み、特色などを知っていただくことがメインとなりますが、昔の懐かしい風景を同窓生に感じてもらうことも蘭岳の役割です。某日、ネタ集めのため水元キャンパス周辺地域を散策してみました。自身も数十年前に卒業した立場から一言「懐かしい～、ほとんど変わってないっ!」。本当に変わっていないのです…近年都市圏を中心に変化が激しく、若干お疲れ気味の同窓生も多数おられると思います。その疲れた身体、頭を癒すために水元キャンパスを訪れてはいかがでしょうか? 仕事、家庭の都合上どうしても来れない方は、次回の蘭岳で癒されてほしいと思っております。9月発行前に少しだけ、水元周辺の写真をお見せいたします。



学内で唯一の木製電柱が
図書館裏にある



情報棟横の階段、
推定2万人以上利用したであろう
通学用階段



昭和40年代以降の卒業生は
必ず見てる風景



サークル会館も
半世紀以上変わらない



登別と室蘭の境目、
自然豊かな鷺別川沿い

(Garoon: 総務広報課秘書広報係、E-mail: koho@muroran-it.ac.jp)

(総務広報課秘書広報係)



室蘭工業大学のキャラクター「ムロびょん」

■編集発行

室蘭工業大学総務広報課
〒050-8585 室蘭市水元町27番1号 電話 0143-46-5014

■印刷所

株式会社日光印刷
電話 0143-47-8308